

昨秋、歴史遺産を見学する機会があった。通勤の道すがら見たことのあった掩体壕が市内に七つ残り、戦争中には四十一もあったという。掩体壕は飛行機を覆い隠すため、コンクリートのほか、木、竹、土等で作られた。

現在残っているコンクリート製の壕の二つは、土を盛り上げて形を作り、子どもや地域住民などが踏み固め、その上にコンクリートを流したという。五十センチメートルもの厚さがあり、簡単には取り壊すことができずに今まで残っているらしい。

手結では、震洋隊慰霊碑を見学した。震洋とは第二次世界大戦中、海軍の開発した特攻兵器の名称である。ベニヤ板で作られたモーターボートの船先に爆薬を搭載し、搭乗員が操縦して敵の艦船に体当たり攻撃をしようとするものであった。

手結に配置された震洋二八部隊は一九四五年八月二六日、出撃命令が出、その準備中に爆発事故があり、他の艇も連鎖的に爆発し、搭乗員、整備員など百十一名の人が亡くなった。

なぜ、戦争が終結した翌日に？なぜ、準備中に爆発が？など、犠牲者の多さへの衝撃と共に多くの疑問が湧く。軍隊の武装解除が遅れたこ

コンクリートとベニヤ板

と、艇からガソリンが漏れているとの報告があったが無視されたいことなど、未解明な部分が多いとはいえ、理不尽な理由が重なっている。

物資不足の折にもかかわらず、飛行機のためには分厚い鉄筋コンクリートの掩体壕が作られたが、人が乗る震洋は薄い板で造られ、他艇の爆発で引火するような状況にあった。戦争に於いて、人の命がどの様に扱われていたのか、私たちの身近な戦争遺跡、慰霊碑は雄弁に教えてくれる。

身近にあり、見過ごされてしまいうような戦争遺跡が、現代の私たちに人の命や人権の大事さを教えてくれる貴重な存在であることを痛感させられる一日であった。若い世代をはじめ多くの人々が、気軽にこうした体験が持てるよう皆で知恵を出し合い、過去の教訓を生かしていければ、と思う。

*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かくなりがちが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

880・6569